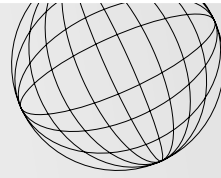


世界をみつめて4

道に座る

梶川 裕司



「最近の若者は……」というのは、中高年の雑談の定番である。「最近の若者は、働く意欲がない」というマクロの問題から「最近の若者は、平気で道に座り込む」というミクロの問題まで、話題には事欠かない。このうち若者のとくに見苦しい行動として指摘される「道にお尻をつけて座る」は、昭和の時代に「ツッパリ」といわれた若者たちの通称「ヤンキー座り」の後継型だ。「ヤンキー座り」は、ちょうど和式のトイレでしゃがんだ姿勢に酷似しており、それにちなんだ別称もある。その連想ゆえか、当時「ヤンキー座り」に対して大人たちは、公衆の面前でこの姿勢をしている彼らを許せず、日本人の恥として彼らを糾弾した。そして当時、私も同様の見方をしていた。

だが、ある本に出会って「ヤンキー座り」への見方が大きく変わった。それは本学イタリア語学科・野村雅一先生の著書『ボディランゲージを読む』（平凡社1994年）である。同書の「すわる・歩く」の章で、中国人の伝統的な休息の姿勢が、あの「ヤンキー座り」と同じであること、鹿鳴館時代の婦人が舞踏会の合間に「ヤンキー座り」で休息していたことがフランス人画家の書いた絵とともに紹介されている。「ヤンキー座り」は、アジアの伝統的な休息の姿勢であり、決して卑しむべき下品な姿ではない。また休息という観点からは合理的な姿勢でもある。そして結果的に「ツッパリ」たちは、その伝統文化の継承者だったのである。

とはいえ欧米人から見れば、奇異かつ下品に見えるこの休息姿勢が、グローバリゼーション、すなわちアメリカ化の中で減びていくことは想像に難くない。では、その後継型の「道にお尻をつけて座る」はどうだろうか。この姿勢は、どう考えてもアメリカ化に反しているだけでなく、その上、不潔である。「ヤンキー座り」ではお尻は宙に浮いており、接地しているのは靴だけである。だから衛生上、まったく問題はない。

だが、お尻を地面につけてしまえば、汚物が付着する危険がある。とくに彼らの座る場所が、コンビニの前や雑踏の駅構内などであることを考えれば、その危険性は格段に高い。

このような不潔な休息姿勢の起源はどこにあるのだろうか。まず考えられることは「家庭のしつけがなっていない」だろう。家でだらだら床に寝ころがっている。これが地面に座ることにつながるという論である。しかしどんなルーズな家庭でも、地面にお尻をつけて座るという作法は『教えない』。さらに心理的に、家の床から、地面への移行のハードルは高い。

そこには何かそれを積極的におこなわせる要因がある。着目すべきは、地面にお尻をつけて座ることを『教える』ところがあるということだ。それは学校だ。小中学校の頃、数々の場面で、お尻を地面につけて座っている自分を思い出してほしい。運動会の練習の時、遠足で電車やバスを待つとき、屋外で先生の話を書くとき等々。

家族との接触時間が多い子どもたちは、家族の前で、その姿勢をとったとき「やめなさい!」といわれるため、だんだんとその姿勢はとらなくなる。しかし、家族との接触時間が少ない子どもたちは、この学校独特の伝統文化をそのまま継承する……。

日本人、日本文化をこよなく愛しておられた本学英米語学科元教授・故ジェームズ先生が言っておられた。「学校で、平然と子どもたちを地面に座らせていることが信じられない。あれは捕虜の座り方です。子どもたちの人間としての尊厳を傷つけています。」われわれ大人は、反省すべきだろう。若者に見られるネガティブな行動を、観衆の立場で批判しているわれわれが、実は、その元凶であるかも知れないということ。

かじかわ ゆうじ

(マルチメディア教育研究センター副センター長・教授・教育心理学)